

〔書評〕

水本精一郎著

『島崎藤村研究——詩の世界』

『島崎藤村研究——小説の世界』

田口律男

いつもあらがっていた。全身全霊でぶつかっていた。「概念的」と論されるのに、ポレミカルで、移り気な、どうしようもない学生だった。卒業後も、その姿勢は変わらなかった。むしろ増長した気さえする。先生はどうだったろう。きつと疎ましかつたに違いない。しかし、記憶のなかで微苦笑する先生の眼は、いつも真剣だったような気がする。いまこの場でも、そうありたい自分がいる。それが甘えや感傷であることは承知のうえで……。

*

ななにに絡んでいたのか。むしろ文学研究の方法についてである。『小説の世界』の冒頭には、「創造の「場」について——創作主体復権を試みて『夜明け前』冒頭に及ぶ——」が配置されている。一九九四年、六五歳あたりの論稿だ。先生の文学観、文学研究に賭ける思いがぎゅっと凝縮されている。これを冒頭にもってきた中原豊さんは、さすがに慧眼だ。薫陶を受けたものならば、だれもが記

憶する先生固有のワーディングが随所にちりばめられている。

と同時に、先生には珍しく「西欧を中心とした現代文学理論」に言及し、その「代表」としてロラン・バルトを名指して批判している。そのポイントが、「専ら創作の場から主体の問題を捨象して来たこと」にある。それはファシズムの「地ならし」である「自己喪失や絶望・虚無」につながるという。その当否については問わない。いましばらく先生の文学研究の核心に迫ってみたい。

先生は、「創作主体そのもののエネルギーの燃焼」を最重視する。それは、「創作主体が、意識的世界における精神的葛藤を持続させ、そのことよって無意識の世界にまで潜入しつつ、遂には更なる根底に流れる生命力・生命のエネルギーに触れえたととき」湧出するという。また、そうした創造の「場」では、作者の「意図・モチーフ、構想、イメージ、ことば、効果など一切」が有機的に絡み合っているともしよう。そのことを時枝誠記、国木田独歩、志賀直哉、石川淳、

ポアンカレ、フロイト、北村透谷、リルケなどを横断しつつ解き明かしていく。何のために？ むろん島崎藤村の創作の「場」の秘論を明らかにするためにである。先生は、『夜明け前』の書き出しを吟味し、つぎのように結論づける。

……『夜明け前』の書き出しは、創作主体の志向が濃密に作動した、いわば創造としての「場」なのであり、それ故また、そのすべての表現が創作主体によって稠密に統一化されたものである。

こうした分析手法は『夜明け前』に限定されるものではない。むしろ両著に収められたすべての論稿が、それに支えられているといっても過言ではない。もう一例だけあげるなら、『詩の世界』に収められた「融解された自伝——「深林の逍遙」を読む（一九九一年）」にも、つぎのような一節がみえる。

叙景と内面の声、上層と深層とが互いに相呼応し、漸層的に深化されてきた歩みが、ついに最も深いところ、この場所ですべてが凝結され、それらを呑みつくすかのように、深紅の色彩の中に溶けこませている。従って、それは又、自然の美しさ、それへの讚美のみではなく、歌い手自身の内面の歡喜の爆發となつて、われわれ読者に訴えてくるのである。

私はこうした文章のなかに、誇張ではなく、先生と島崎藤村との深い交感（コミュニケーション）をみる。これが先生による徹底した藤村の「スタディ」の結果であることは疑うよしもない。つぎの引用にある「透谷」を藤村に、「藤村」を「私」（先生）に読み替えてみれば、そのことは一目瞭然になるだろう。

透谷に対するスタディは、同時に藤村自身のスタディの集積と

微妙に照応する。つまり、透谷のスタディによる新しい発見は、そのまま藤村自体の内的成長によって可能となるのであり、逆に発見された新しい意味は、藤村の内部で凝固せんとして先生の志向を改めて確認させるような凝集力として機能しているのである。（『小説の世界』二〇三頁）

私はこうした先生の研究姿勢に羨望の念を禁じえない。と同時に、ある種の疑問も覚えずにはいられない。なぜ先生は、ここまで深く藤村に同調しうるのであるのか。藤村が透谷を受容するには、それに見合うだけのリセプターが必要だったように、先生が藤村を受容するには、先生の内部にも、それに見合うだけのリセプターが必要だったのではないか。別にいえば、先生をして藤村研究に駆り立てた「ライトモチーフ」はなんだったのか。先生の「内部で凝固せん」としている生の志向」とはなんだったのか。ここにきて私は、自分が先生の生涯のなにも知らないことに気付き、愕然とするほかないのである。

*

むろん私の疑問は、そこにとどまらない。先にふれた巻頭論文のなかで、先生は石川淳を引きながら、つぎのように述べていた。

読者にはさまざまな読みがあつても、それはそれでいい。しかし、それはすべて作品の「生命ある文字の像」に痕跡として残された「精神の格闘」、エネルギーに触れ、感応した結果なのであつて、文学作品の研究対象はその拡散されたものを問題にするのではなく、その根源としての作者の「精神の格闘」、エネルギーそのものを問題としなければならぬのである。

当時の私がつともあらがったのが、こうした文学研究の方向付けであつた。しかし、いまはいくらか冷静に考えられる。すなわち

それは文学研究における必要条件ではあっても、十分条件ではないのではないかと。これ以上の贅言は慎むべきだが、あえてこだわれば、どんなに作者の「精神の格闘」によって生みだされた作品でも、それが言葉の縦系・横系で織られたテキストとなる以上、作品と作者とが完全に一致することはありえない。先生のいうように、「創作主体そのもののエネルギーの燃焼」を問題にすることは必要かつ重要ではあるが、そのみをエンド（目的／結末）にすることは、テキストそのものもつ「エネルギー」（それは作者のエネルギーとは別物である。）を封印することになるのではないか。

だからといって、「読者にはさまざまな読みがあっても、それはそれでいい」とはならないだろう。そもそも読書行為は、それほど自由なものではない。放っておけば、惰性的な一般論に回収されるのが落ちだろう。私としては、先生の最重視する「創作主体そのもののエネルギーの燃焼」を尊重しつつも、同時代コンテキストのなかで、テキストが引き起こす干渉的な意味作用を多角的に検証することを自らの研究課題として引き受けたいと願っている。それが言語論的転回以後の文学研究の宿命でもあると思うのだ。もちろん天に在る水本先生は、微笑笑しつつ、つぎのように諭してくれるだろう。「やっぱり概念的だね。」

(二〇一〇年二月一日 近代文藝社 二四九頁)

一〇〇〇円＋税)

(二〇一〇年二月一日 近代文藝社 四六七頁)

一八〇〇円＋税)

(たぐち・りつお)